

能以前の鼓胴

高桑 いづみ

能の小鼓は雅楽の考鼓から、大鼓は二ノ鼓

から派生したという俗説がある。小鼓は胴の形態が雅楽鼓とは異なるので、領首しがたいが、大鼓は胴の中央に節を設け、乳袋と棹の継ぎ目を座で区切る点で雅楽鼓に近い。もちろん大鼓には乳袋部分の鬚(かづら)がないし、裝飾や寸法も異なるので一足飛びに現在の鼓胴が誕生したわけではないが、雅楽鼓の規格も現在ほど定まっていなかったようなので、さまざまな段階を経て雅楽鼓から大鼓が派生した可能性は高いと言えよう。

ところが、これまでこの推測を裏付ける過渡期の鼓胴の所在が不明であった。能サイドの古い鼓胴としては、永享二(一四三〇)年の銘を持つ旧竹生島宝蔵寺蔵の「雷雲蒔絵鼓胴」(現京都国立博物館寄託)が知られている。桃山期以降の鼓胴と比べると多少全長が短く口径が大きい、大鼓として充分通用する規格である。世阿弥の存命中、既に今日に通じる鼓胴がほぼ完成していたことを示す貴重な存在と言えよう。しかし、この大鼓以前、雅楽鼓に連なる鼓胴は否として行方知れ

ずだったのである。

ところで、筆者は近年、東京国立文化財研究所芸能部を中心とするグループで古い雅楽鼓の調査を行っている。能の鼓は対象ではないのだが、偶然、風変わりな鼓胴にめぐりあった。見方によっては大鼓へ発展する過渡期の鼓胴と考えられなくもないのでここに簡単に報告し、識者のご判断を仰ぎたい。

まず紹介するのは、奈良県天理市石上神宮蔵の鼓胴である。九調遺存するうち四調は完成期以降の小鼓、もう一調は雅楽の三ノ鼓だが、他の四調はそのどちらにも属さない異様な姿をしている。全長はさまざまで、三四・九、三三・四、三二・一、三一・〇センチ。現在の大鼓より若干長め、いわゆる雅楽の志鼓に近い規格である(現行大鼓の標準値は二八・二九センチ)。このうち三二・〇センチの鼓胴は乳袋部分のウケが浅く、革口面にノギリで切断した跡が見られる。かつてはもう少し乳袋が長かったのだろう。別の鼓胴では、乳袋と棹の付け根に穴が開いている。調子を整えるために内部を削った際、うっかり

開けた穴らしいのだが、今日の雅楽で鼓の調子を気にする事はない。かつては雅楽でも鼓に耳を傾ける事があったのだろうか、それとも調子を問題にするような中世芸能、たとえば猿楽や白拍子等を囃す鼓だったのだろうか。四調とも黒漆無文だが、彩色の痕跡がわずかに見える。雅楽鼓によく見られる極彩色の縹縹模様が描かれていたのかも知れない。

なによりも特異なのは乳袋部分である。雅楽鼓のような鬚がない。そのかわり、鬚に相当する部分に三筋の線を彫り、鼓胴によってはそこに朱を施して鬚の名残をとどめた恰好になっている。線彫りはいかにも鬚の代用といった印象を与えるが、これがなければまさに大鼓胴である。大鼓のつるつとした乳袋は、このような過程を経て誕生したのではなからうか。そういえば、革口が能楽鼓に比べて薄く雅楽鼓風だが、節の形、中央を膨らませた棹の形状(雅楽鼓の棹は概して太さが一様である)、整った座の姿は大鼓風である。乳袋のふくらみも雅楽鼓ほどではなく、口径と全長の比率は「雷雲蒔絵鼓胴」や現行大鼓に近い。石上の鼓胴は、雅楽鼓の風貌を強く残しながら大鼓へ一歩踏み出した段階の遺物、と推定したい。

石上では、この鼓胴を「渡御祭」で使用したと伝えている(『石上神宮宝物誌』昭和四

年刊)。これは、永保元(一〇八一)年に白河天皇の勅使が参向し、走馬十列を奉ったのもって嚙矢と伝えられる歴史の古い祭礼で、その様子を描いた永享四(一四三二)年の額も残っている(ただし摩滅が著しい)。貞享四(一六八七)年の額には伶人や田楽、馬長の稚児、細男、競馬など五十人程の行列が見え、さながら春日若宮御祭のようなページェントを繰り広げたらしい。現在では毎年十月十五日に斎行されるが、舞楽が舞われ、鳳凰の渡御に際して同じように猿田彦・稚児・太刀持ち・御幣持ち等が登場し、伶人が道楽を奏するという。くだんの鼓胴は、この祭礼の雅楽で用いたのだろうか。

ところで、これとはほぼ同じ形態の鼓胴が香川県坂出市の神谷神社にも現存するらしい。神谷神社は「延喜式」にその名が載る由緒ある古社で、建保七(一一一九)年に造営された本殿は、最古の流造社殿として国宝に指定されている。問題の鼓胴は未調査だが、先代官司の残された手書きの「神谷神社宝物記」によると全長三三センチ、黒漆無文で髹のかわりに線彫りが施してあるという。写真で見ると古色を帯び、石上神宮同様虫害が著しい。全体の姿だけでなく、乳袋と槌の付け根に穴が開いている点も石上の鼓胴そっくりである。神谷神社では鼓胴の他に鎌倉前期作と推

定の木造隨身立像二体や舞楽面二面を伝えており、近隣の青海神社にも同様の舞楽面が二面伝存する。この鼓胴も雅楽鼓として使用したのだろう。地理的に少し離れるが、同じ香川県の観音寺市琴弾八幡宮では、享徳元(一四五二)年の放生会に舞楽を奉納した記録が残っている。

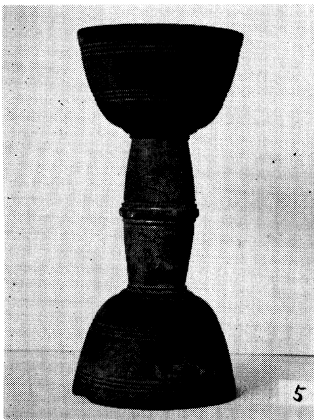
略式の雅楽鼓、と言いきってしまうにはあまりに特異な形状なので、中世芸能の雛子あるいは神事に用いた可能性も考えたい。ことに石上神宮には固有の神事が伝えられているので、それとの関係は今後調査しなければならぬだろう。現段階では早急に結論を出せないが、何の雛子だったにせよ、石上と坂出という離れた場所でも同じ様な鼓胴が存在するのは興味深い。一時期こうした鼓が半ば規格品のように工房で製作され、かなり広い地域に分布していたことを物語っている。その時期が問題になるが、彩色が推測の手がかりとなりそう。現行の雅楽鼓では黒塗りの上に彩色を施したものはないが、実は平安後期から鎌倉期の絵巻類には黒漆無文の鼓がよく描かれている。『扇面法華経』や『鶴岡放生絵巻』、『法然上人絵伝』で遊女の持つ鼓、『年中行事絵巻』で巫女の持つ鼓等がそれである。古い時代の遺物に目を向けると、伎楽の

細腰鼓(東大寺・薬師寺蔵)や延文二(一一三

五七)年の銘を持つ雅楽鼓(東京国立博物館法隆寺宝物館蔵)など、雅楽系の鼓胴にもこうした例がいくつか見受けられる。天福元(一一三三)年の奥書を持つ『教訓抄』巻九では鼓名物として「慈明寺黒筒・薬師寺黒筒」をあげているし、『体源抄』巻十二にも明德五(一一三九四)年常楽会日記の写しの中に「三鼓二懸の一者黒筒也」とある。鎌倉時代には黒塗りの鼓胴はそう珍しくなかったのだろう。石上や坂出の鼓胴も鎌倉後期の遺物と推定したい。

各地の神社のお蔵には、まだまださまざまな形態の鼓胴が眠っているようである。古い鼓胴の所在をご存知の方、文化財研究所までご一報いただければ幸いである。

(東京国立文化財研究所芸能部研究員)



(石上神宮の鼓胴 加藤寛氏撮影)